

日本語教育通信

国際交流基金 | The Japan Foundation

発行・編集 国際交流基金
日本語国際センター
編集協力 国際文化交流推進協会

「秋の遠足」

おお、しゃれ

阿刀田 高
あとうだ たかし

「教養あるね。いつから?」「今日よ」

あるいは、また、

「奥さん、どこの生まれ?」「名古屋よ」「道理で、なごやか、だ」

などなどと、笑いが生ずる。おわかりだろうか。

前者では、教養と今日よ、が呼応している。後者では、名古屋となごやか、が呼応している。意味のうえではまったくつながりのないことを、発音が似ているということで関連させ、それを楽しむわけである。こうした言葉の遊びを“しゃれ”と呼び、日本人の生活の中では、すこぶる日常的なものである。あまり上等なユーモアではない、という自覚もあって“駄しゃれ”とも言う。“駄”は、つまらないもの、駄目なもの、の意味である。

ほかの言語にも、たとえば英語にも、似たような言葉遊びがあるようだが、日本語ほど多くはあるまい。

日本語は、音の数が少ない。アイウエオ表の51文字、それに濁点と半濁点の25文字を加えて合計76文字で、一応、日本語は表記できることになって

いる。実際に用いる音は、もっと多いけれど、英語や中国語などと比べて、ずっと少ない。少ないから同音異義語が生まれやすい。「貴社の記者、汽車で帰社した」なんて、日本人は耳で聞いて、ちゃんとわかるのである。同音異義語が多いので、すっかり慣れてるのだ。

いま述べた“しゃれ”も、これと深く関係している。似た音が生まれやすく、それに慣れてるからこそ“しゃれ”が楽しめるのだ。

職場を見わたせば、この“しゃれ”をよく言う人が、ひとりやふたり、きっといるだろうし、日本の文芸には、落語は言うに及ばず、和歌などにも、この手法はよく用いられている。“しゃれ”を理解することは、日本語の上級コースとして不可欠である。

さて、埼玉県に行田という市がある。昔は忍と言った。東京を江戸と言ったのと同じである。そこで「ぼつぼつ、行田の米だね」

忍で取れた米なら、忍米、つまり、おしまい、となる。現代では、日本人でも知る人の少ない、古い“しゃれ”である。

(小説家)